

新作能

能・蝶々夫人 上田 邦義 作

Noh: Madama Butterfly by Kuniyoshi UEDA

プッチーニ生誕150年にあたり、蝶々夫人のために。 作者

*Commemorating 150th Anniversary of Giacomo Puccini's birth, I
dedicate this play to the spirit of Chou-chou-san or Madama Butterfly.*

--Kuniyoshi UEDA

This is a sequel to the opera *Madama Butterfly*. Pinkerton, getting old, feels more and more remorseful for the suicide of Chou-chou-san. He visits Nagasaki to find no more her house on the hill, but is led to a church by a flying butterfly. There he meets an old woman who is really the ghost of Chou-chou-san. The next day she appears again in the mass, and showing a beautiful dance, she flies away into a blue sky.

曲柄：三番目（夢幻能） The third category play

季節：春 Spring

所：長崎 Nagasaki, Japan

時：現代 Modern time

人物

ツレ：ピンカートン（元アメリカ海軍士官。今は老人） Pinkerton

前シテ：老女（長崎の街の女） Mae-shite: An old woman

後シテ：蝶々夫人の霊 Nochi-shite: Ghost of Chou-chou-san

アイ なし（替ノ型。あり）

囃子：太鼓なし（替ノ型。太鼓入り）

作物なし：（替ノ型。十字架にパイプオルガン）

あらすじ

前場

蝶々さんの真情を裏切り自害させてしまったピンカートン（ツレ）は、年老いてますます後悔の念に苛まれ、妻ケイトのすすめもあって、ひとり長崎を訪れる。丘にのぼってみると、かつて蝶々さんが住んでいた家は

もうない。茫然としていると一翅の蝶が現われ、それに導かれ教会にたどりつく。するとひとりの老女（シテ）が現われて問答するうちに、ここはかつて蝶々さんがピンカートンと結婚するために神道も仏教も捨ててキリスト教徒になった教会だと知る。彼が去った後はあの丘の上で三年間、毎日のように遠い海を見つめ、「ある晴れた日に」必ず帰ってくる。と信じて待ちわびていたと語る。彼が「しかし彼女は一度も愛しているとは言わなかった」と抗弁すると、彼女は、「そなたたちは愛という言葉で語り約束するが、果たさない。私たちは、約束しないで果たす」と応ずる。彼が「しかし三年も経てば時効だ。忘れたと思った」とさらに反論すると「まことの心は、時の長さや所の遠近に関係ない」「死でさへ人を引き裂くものではなく、それまでの関係を加速する」とこたえ、「イエスが『永遠のいのち』と言ったとき、それは死後のことではなかったのか」「彼女が自害したのは『誇り』ゆえ」と語り、明日この教会のミサでまた会いましょうと言って消え失せる。

中入

笛と小鼓による静かなアシライ。原作オペラ『蝶々夫人』
二幕第一部から第二部への間奏曲（ハミングつき）の感じ。
やや長めにてもよし。やがて夜が明ける。

後場

ピンカートンは、自分の軽薄さと裏切りを謝罪し、ひとり通夜して朝を迎える。やがてミサが始まると美しい天女が現われて、「果てしなき天が架け橋。

その下（もと）に。汝（な）が妻ほどに幸（さち）あるはなし。未永く仕合せに」と謡い、「蝶一翅（ちょうひとは）ゆえに悲しみ給ふなよ」と言い残し、天女の舞を舞い、紺碧の空へ消えてゆく。

ジャコモ・プッチーニ (Giacomo Puccini, 1858-1924)

1858年12月22日、トスカーナ地方ルッカの大聖堂の楽長を父に生まれる。2008年は生誕150年に当たる。

オペラ『蝶々夫人』初演、ミラノ、スカラ座、1904年は大失敗であったが、三カ月後、ミラノの東、ブレーシャで大成功をおさめ、人気オペラとなり、以後イタリア各地で、さらに同年のうちにブエノスアイレス、アレクサンドリアで公演。引き続きロンドン、ブダペスト、ニューヨーク、ワシントンでも上演され、蝶々さんは永遠のヒロインとなった。

能・蝶々夫人

上田 邦義 作

名宣 ツレ勝方ニ「これはかつてアメリカ海軍に仕へたるピンカートンと申す者なり。われ昔この長崎に契りし女あり。三年も経ぬればすでに忘れしものと思ひ。妻を伴なひ訪ねてみれば。思ひも寄らず。わが児と共にわれを待ちぬたり。怖れおののき逃げ帰りたいば。かの女それを知り。哀れにも自害し果てたるとかや。われは老いぬれば。いよいよこのこと的心にかかり。妻なるケイトのすすめもあり。このたび長崎を再訪せり。これよりかの丘にのぼり。その住ひをも訪ね。弔ひせんと思ひ候。

上歌ヨリ

「懐かしや。この長崎の丘なれや。この長崎の丘なれや。遙かに青き海原や。港や街の賑はしく。咲き乱れたる花々の。若き心を燃やしける。愛の住処を訪ねみん。愛の住処やここならむ。

詞

「急ぎ候ほどに。丘の頂きに着きて候。さても不思議やな。見渡せば。かつてありつる藁葺き家の。愛と悦びの跡形もなく。苔むす石の庭園も。八重咲きの見事なりし桜の木々も。すべて消え失せたるとは。や。一羽の蝶のわれをいづこにか導かんと。従ひ行けば別の丘なる教会に至りぬ。入りてこの身を休らはんと思ひ候。

呼掛

シテ「なうなうそこなる御方。何しにこの教会にて休らひ給ふぞ。

ツレ 「これはアメリカより来たれる老兵にて候が。かつて契りし女を

弔はんとて彼の丘に参りたるが。住処もなにも見当たらず。され

ばここにてしばし休らひて候。もしやそなたは彼の丘に住める女

をご存知なきか シテ「この街の者にてかの女を知らぬはなし。

さてはそなたは。かのピンカートン殿にてあるや ワキ「いかにも

われはピンカートンなり。かの女の自害せるを聞き及び。誠に哀

れに候ひけるが。わが身にかまけて弔ひにも参らず。されど老ひ

ぬれば。いよいよ心休まらず。このたび思い立ちて参りて候。さ

ればかの女のこと何かと承りたくこそ候へ シテ「されば少し

く語り聞かせ申すべし。

カエテ 「そもこの教会とは。かの女の。アメリカびとと夫婦となるに。

神道も仏道もすべて捨ててキリスト教徒となりしところなり。たと

ひ家族も親類も。すべてに逆らはれやうとも。これよりは夫なる人

の神を信じますと。かほどの決意にて夫婦の契りを結びしとかや。

しかるにその後 カカル「かの男。アメリカへ戻りて帰り来ず

下歌 地謡 「さればこの女。来る日も来る日も。男の帰りを待ちたるとなり

上歌 シテ 「三年の春の夢ならば 地 「三年の春の夢ならば。憂きはそのまま

覚めもせで。ある晴れた日に遥かなる。海上に浮かぶ一筋の。白

き煙けむりの流れたり。やがて見えたる白き船。近づき港みなとに入りたれば。

礼砲れいほうを轟とどろかすなり シテ「わが夫つまのつひに来たれり

地「偽いつはりりの言葉にてはあらざりき シテ「駒鳥こまどりの雛ひなを抱いだく季節きせつには

地「薔薇ばらを持ちて帰り来たるぞと。その言葉こそ頼たのみなれ。されどそ

の薔薇ばらとは。アメリカびとの妻なりき。おろかの心なりしかな。愚おろ

かなりける言葉頼たのみかな

詞

ツレ「されどかの女おんなは。われを愛あいすとはただの一度いちども言はざりしが。

シテ「それはそなたたちの慣習ならはしなり。愛という言葉にて語り。約束やくそくせる

も果たはたさず。われらは異なり。約束せずには果たすなり ツレ「され

ど三年みとせも経ぬれば時効じこうなり シテ「それとても。そなたたちの慣習ならはし

なり。まことの心こころに。時の長さ。遠き近きは関かかはりなし。また

カカル「それ人ひとの死ぬるとは 地「死ぬるとは。人と人とを引き離はなす

ものならず。ただそれまでの関係かかはりを速はやめ。深ふかむるものならずや。

イエスと言へる人のたまの宣のたまひし「永遠えいえんのいのち」とは。死後しごの世界せかいの

ことならずや。かの女おんなの。自らみずかに死を選えらみしは。誇ほこり「ゆえな

りと語かたれば。明日あすこの教会きょうかいにてミサあるべし。さらばそこでと言

ひ捨てて。かき消シメすやうに失うせにけり

○ 中入の間、笛と小鼓にて静かなアシライあり。

原作オペラ『蝶々夫人』二幕第一部から第二部への夜明けを待つ間奏曲

(ハミング・コーラスつき)の感じにて、やや長めにてもよし。

待謡

ツレ「不思議やな。夢か現か昨日の。夢か現か昨日の。女の言葉のま

ことなれば。浅薄なりし若き日の。己が罪過逃れがたし。許しを

乞ふて通夜をせば。まどろむ中に夜は明けて。昨日の今日とはな

りにけり

後シテ「今は昔。交わす言葉のこの世なれば 地「かくあるべしとも

思へども シテ「嬉しくもあり 地「悲しくもあり シテ「誇りも

て生き遂げられぬものならば 地「誇りある死を選みたるなり

「翔リ

シテ「果てしなき。天が架け橋 地「その下に。汝が妻ほどに。幸ある

はなし。末永く。幸せに シテ「われは蝶。蝶一翅 「舞

ノル 地「蝶一翅。ゆえに悲しみ給ふなよ。空のごと海のごと。さりげな

く深く優しく。天女の舞も軽やかに。花の如くに。蝶の如くに。

翅打ち震はせて シテ「そなたの心も白い着物に包み込んで

地「そなたの心も白い着物に包み込んで。共に別世界へ旅立つ如く。

長崎の港も。丘も桜花も。あと見下ろして。遥かに青き。空の彼方

へ。遥かに青き空の彼方へ。姿は消えて。行くへも知れずなりにけ

り